

## アテネのパウロ

### ―使徒の働き一七章一三―三四節―

小畑進

パウロを案内した人たちは、彼をアテネまで連れて行った。そしてシラスとテモテに一刻も早く来るように、という命令を受けて、帰って行った。(一七・一五)

『使徒の働き』第一七章、使徒パウロのアテネ入りの記録です。歴史的な事柄が、これと言った前宣伝もなく、図らずもといったかたちで、いきなり山場でした。―思えば、まったく思いがけないヨーロッパ伝道でした。パウロが企図する〈第二回海外伝道〉は小アジアを目ざし、おそらくは〈エペソ〉に直進しようとしていました。それが次々と妨げられ、北方に迂回を余儀なくされて、ダーダネルス海峡に近いエーゲ海の港町トロアスに導かれます。しかもさらにマケドニア人の幻から渡海してネアポリスに上陸します。これぞヨーロッパ大陸です。まずは、植民都市ピリピにヨーロッパ最初の教会が設立されます。さらには古い女の

癒しから冤罪をこうむって投獄のうきめにあい、ついで軍用道路を進んで南西のテサロニケに入って教会を設立。町のならず者の暴動でペレヤに移るも、扇動家らに妨害される。そこでペレヤの兄弟たちはパウロを海路アテネへ送り出したのでした。思いもかけぬアテネ入りでした。パウロの同僚二人、シラスとテモテはペレヤに踏みとどまり、パウロはひとりアテネに入ったのです。時にAD五年の初夏と言われます。

パウロを案内した人たちは、彼をアテネまで連れて行った。そしてシラスとテモテに一刻も早く来るように、という命令を受けて帰って行った。(一七・一五)

思いもつかぬアテネ入り。多感な使徒はどんな感慨をもよおしたことでしょう。ヘレニズム文芸の源泉地として不滅の名を残すアテネ―。

※ここで聖書記録の矛盾云々という問題が起こります。すなわち、第一テサロニケ三：一、二(「私たちがアテネにとどまることにして、私たちの兄弟であり、キリストの福音において神の同労者であるテモテを遣わした」との問題です。すなわち、『使徒の働き』では、パウロが「シラスとテモテに一刻も早く来るように」とペレヤの兄弟たちに命令しているところを見ると、ペレヤに踏みとどまっていたはずの「テモテ」が、第一テサロニケでは「アテネ」にいたことになる。矛盾だと(たとえはLake and Cadbury “The Beginnings of Christianity” Part I. vol. IV の使徒一八：五のノート)。

しかし、文献学の通則 *Distingue tempora et scriptura concordabit* の一例で、テモテはペレヤに踏みとどまったのですが、間もなくアテネのパウロのところへやって来ていっしょになった(実際、パウロはシラスとテモテに「一刻も早く」アテネに来るようにと命令していました。)ところが、やがてテサロニケに問題惹起ということで、テモテは再びアテネからテサロニケへ派遣された。「時を区別せよ。さらば文書は調和せん」の一例ではありませんか。その後、両者が再会したのは、コリント

の地において、ということになります。「そして、シラスとテモテがマケドニヤから下って来ると（つまりこのコリントにやってくる）、パウロはみことばを教えることに専念し、イエスがキリストであることを、ユダヤ人たちにはっきりと宣言した」〔使徒一八・五〕のです。

このことは、第一テサロニケ三・六にも「ところが、今テモテがあなたがたのところから私たちのもとに帰って来て、あなたがたの信仰と愛について良い知らせをもたらしてくれました。」とあるとおりです。

周知のように、この第一テサロニケの手紙はコリントから書き送られたものです。いや、逆に、この記事からしてコリントから書き送ったものだと判定される次第なのです。

さて、送って来てくれたベレヤの友人がひき返してしまうと、パウロは、テモテやシラスが追って来るのを待ちつつ、ひとりアテネでの日々を過ごしました。ウイリアム・ラムゼイはテモテ、シラスがベレヤからやって来るのには、二週間以内の日数があっただろうと申しています。その日々を使徒はひとりアテネで過ごしたことになります。〔アテネ〕—それこそはギリシャ文明の大本山、ヘブライズムに対するヘレニズムの源泉地でした。当時のアテネは、その最盛期・黄金時代、いわゆるペリクレスの世（BC四九五―四二九）を過ぎており、ローマを初め、コリント、アレキサンドリヤ、アンテオケといった新興都市が勢力を伸ばしていましたが、それは政治上、経済上のことであって、アテネは依然としてその偉大な遺産をもって輝いていました。

思想界ではソクラテス、プラトン、アリストテレス、ゼノン、エピクロスといった哲学者たち。ソロンやペリクレスといった政治家、雄弁家デモステネス、サラミスの勝利者テミстокレス。また盲目の大詩人ホメロス、農民詩人ヘシオドス、歴史家ヘロドトス、ツギジデス。喜劇作家のアリストファネス。三大悲劇作

家のアイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデスと、枚挙にいとまなしでした。

音に聞こえたアクロポリス丘上に浮かぶ白雲を仰げば、パウロも「アテネ」を不朽ならしめる英雄偉人の名を思い出して興奮したことでしょう。時にAD五一年の初夏という。古代の夏の日射しにきらめく大理石の都は、そそくさとまぎれこんで来た独りのキリスト教伝道師などには目もくれなかったことでしょう。ましてや、このちっぽけな一羽のユダヤの旅鳥が、まさかアテネと、その世界観をくつがえしてしまうとか、アテネを飾る神々を宗教的崇拜の対象から、美術鑑賞の対象に変えてしまうなどとは思っても及ばなかったことでしょう。

一方、パウロですが、彼はこの歴史的なアテネでの日々、その心を占領して来る熱いものを覚えました。その心中に沸騰してくるものを。それが「憤り」であった、と。

さて、アテネでふたりを待っていたパウロは、町が偶像でいっぱいなのを見て、心に憤りを感じた。

### 〈二七・一六〉

と。

古今を問わず、世界の旅人が歓声をあげるアテネ。古代文化の王冠アテネの地で、パウロが催した感興が「憤り」であったということは強烈なインパクトです。当のパウロ自身も、そのことに驚いたのではありませんか。―もとより、パウロはアテネの壮観を解せない唐変木ではありませんでした。彼はあとで見られるように、ギリシャの哲学・文芸に通じた文化人、一流の文化人でした。それを広く、深く、大きく理解しうる教養人でした。

しかし、その心をついに占領したのは「憤り」だったのです。偶像に対する憤激だった、ということは何

撃的です。

パウロ、アテネにて彼らを待ちをる間に、町に（アテネの町に）偶像の満ちたるを見て、その心に憤慨を懐く。〈一七・一六〉

当時、アテネは神々の陳列場でした。諸神殿内外はもちろんのこと、道路の両側や家々の軒さきに、神々や神とされた英雄たちの石像が何メートルかおきに林立していました。これより五〇年後の旅行家へパウサニアス〉の報告によると、アテネでは人に出会うよりも神々に出会うほうがやすかった、といわれています。数にして、およそ二万體といわれています。〈アテネ〉という都市名そのものがギリシャ女神の名前でした。父ゼウスの頭部から武装姿で生まれた処女神で、知性を司り、技術と戦争の神。ローマ神話の〈ミネルバ〉に相当しました。

あのアクロポリス丘上のパルテノン神殿も、戦争と文学と知恵を司る処女神アテネ〈ミネルバ〉を祀る本山でした。黄金と象牙の巨大なアテネ像はパルテノン神殿に屹立していました。台座をふくめて十五メートル。〈パルテノン〉とは処女神の意味であり、アテネの象徴でした。そのことに思いあたる時、何を隠そう唯一の創造神を宣べ伝えるパウロの心は燃え立ったのです。

たしかに、パウロは物見遊山のためにアテネにやって来たものではありませんでした。彼には使命があった。創造主の唯一の神、イエス・キリストの神を宣教するという一つの目的があったのです。その観点からすれば、紀元第一世紀半ばの夏の陽ざしに輝く大理石や青銅に彫まれた傑作の誇り高い神像群は、骨抜きにすべき偶像であったのです。

※パウロより数世紀前のギリシャの哲学者エレア派の先駆者クセノファネスも神はただ唯一であり、不変不動なりとし、宗教改革者として、当世の宗教を批判していました。

アテネはその全域がまさに祭壇であり、怒りと呪いの祭壇だった (Alford : p.192)。アテネは、パウロが宣教して来たどの都市よりも、いっそう偶像の愚かに汚染され、支配された都市だったのでした……。

パウロ、アテネにて彼らを待ちをる間に、町に偶像の満ちたるを見て、その心に憤慨を懐く。へ一七…  
一六

はたして、私奴が、この時、パウロに代ってアテネに立ったとして、海拔百五十メートルのアクロポリス岩山を仰ぎ、ドーリヤ式円柱が突きあがるパルテノン神殿やイオニヤ式円柱が支えるエレクチオン神殿を前にしたとしたら、どうだったことか。見とれて、おのが使命を忘れたことか。——もっとも、今日ではギリシャ全土、アテネもまったくキリスト教化され、ギリシャの国旗は、水色地にクッキリと白の十字架のデザインを染め出して、かつてのような偶像宗教は払拭され、当時の人々の礼拝・祈祷のための神像も芸術的遺産、民族遺産と化しています。パウロの当時は単なる芸術作品ではなくて、文字通り礼拝の対象であり、神々だったのです。鑑賞の対象ではなくて、崇拜の対象であり、礼拝・祭祀の対象だったのです。それにしても、

パウロ、アテネにて彼らを待ちをる間に、町に偶像の満ちたるを見て、その心に憤慨を懐くへ一七…一六

という二行の文字は、とかく物好きに墮しがちな者らを叱咤してやみません。——あるいは、人あって、この怒りのパウロの姿をもって、「花の都アテネのドまん中で憤ったなどとは不粹なこと、野卑なことよ」と評しましうか。

なにごとぞ花見る人の長刀

と眉をしかめる向きがあらましようか。しかし、アテネに立って、その偶像に満ち満ちているのに憤る立場

を失っては、キリスト者たるの本分を疑われることでしよう。

※明治の先覚・新島 襄が、神社仏閣しんじあつ比する京都、日本文化の源泉地に挑戦して、キリスト教主義の同志社を開いたのも同じ発奮でしょう。当時、あの京都をキリスト教化するということは、比叡山を琵琶湖に沈めるよりも難しいと評されました。しかし、今日、京都が神社仏閣とともに教会の多い町であること、大学まで建っていることを見落としてはならないでしょう。

とにかく、神の熱心はパウロを食らったのです。およそ、人の本質とか、程度とかは、その人のインタレスト、関心、興味がどこにあるかによって測られるといわれますが、今、アテネのドまん中で、その関心は唯一の神の栄光であり、その後姿には、常にソリ・デオ・グロリアの文字が浮かびあがる使徒には敬服のほかありません。

パウロとしては、名にしおうアテネに来て、この世界最高の教育、教養、知性と情操の中心地と目す都が、こと宗教に関しては、なんとも未開野蛮同然であり、石を彫り、木を刻み、銅をこねて偶像として拝するばかりであったことに、初めは嘔然としたことでしよう。これまで伝道して来た村や町の偶像宗教よりは、まさかと思つて来たのに、同じどころか、これほど偶像に埋まっている町はどこにも見たことがないほどだったのですから。

初め嘔然としたパウロも、世界最高の知恵を自負するアテネが、こと宗教に関するかぎり、なんと世界最俗の地であったことを意外とし、憤激ものだったのです。このあと、第三次伝道旅行の途次、コリントの地から書き送られた『ローマ人への手紙』(AD五七、五八年)には、このアテネ体験が反映されています。

彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。…造り主こそ、とこしえにほめたたえられ

る方です。アーメン。へローマー…二二〇二五と。

※このうち、「鳥・獣・はうもの」はエジプトの偶像をさし、人間の像はギリシヤ、ローマの偶像をさすのでしよう。

近世の宗教改革者カルヴァンも、ことのほかパウロがアテネで憤りをよおしたのは、当のアテネが知恵の本拠、学問の泉と誇っていたくせに、実は最もはなはだしい迷信で満ちていたからであるとして、次のように弾劾しています。

「当時は、世界中が偶像を詰め込まれていたし、神が正しく礼拝されている所が、どこにもなかったのは確かである。途方もない恐るべき迷信が到る所に流行していたから。しかし、サタンはアテネの町をほかのすべての町よりも、もっと魔法にかけていたのだ。従って、ここでは一層はげしい熱中によって人々がその恐るべき偶像礼拝と邪な迷信とに引きずり込まれていた。知恵の本拠にして、その住まいであり、一切の人文科学の母であり、一切の学問の泉であるこのような町が、ほかのすべての町にまさって狂気、無分別、向こう見ずな熱中に陥っていたことは、大いに注目し値する例である。立派な理解力とすぐれた知識のある人たちが、この町を一致して、どんな称賛と尊称とによって飾ったことか。また、この町自体が、ここで形成陶冶されたことのない人たちのすべてを野蛮人と見なしたほどに自らに満足しきっていたかを我々は知っている。…このことから、我々は人間の巧知、すばしこさが神に関する事柄において、一体何の価値があるかということ、たやすく結論することが出来る。」

云々と。中世以来のカトリック勢力の偶像宗教払拭に挺身した当事者の声です。また言います。

「アテネ人が彼ら自身の思い上がりに酔わされて、他のすべての者たちよりも一層見苦しくも真理から



さまよって行ったのを知ろう。

この町の古いこと、楽しみ、美しさは、彼らを高ぶらせ、高慢にした。それゆえ、彼らは神々がそこから生み出されたことを自慢していた。

それで、彼らは神を彼らの市民とするために天から引きずり出したのであるから、地獄の底までも、また果てしない深淵の果てまでも沈められたのは全く当然であった。

とにかく、ここでは人間の知恵のむなしいことに対して、永遠の恥辱の評価が神の霊によって与えられているのだ。というのは、人間の知恵が一層ほめそやされた所では、偶像礼拝が一層恐ろしいほどに支配したし、また、サタンがその幻覚によって人間の理性を一層自由気ままに熱狂させたからである。」と。

※マルコポロも、『東方見聞録』において、ジパングは多くの黄金を産し、人々は色白く、キヤセ挙措典雅にして志高し」云々と録すも、「されど偶像を拝す」と、とどめていました。

啓示の宣教なく、特別啓示の宣べ伝えなくしては、人間最高の知性も、目あれど見えず、耳あれど聞こえなかったからこそ。折角、人間として神の像に似せてつくられ、かつはこれから宣べ伝えようとする御子の贖いの対象として恵まれながら、真の福音に盲目である人間を悲しみ、かつ断罪する声も高かったのでしょうか。こう見て来ると、アテネにおける宣教者パウロの憤り、それは世界史的な意義を有しているように見えて来るのです。―それも、ここの「心に憤りを感じた」のギリシャ原語〈パロクスノマイ〉に注目させられます。これが〈オルゲー〉とか〈スモス〉といった人間的な怒りでなく、〈パロクスノマイ〉であることです。というのは、これは怒りは怒りでも、七十人訳では、もっぱら神の民の偶像礼拝に対する主の憤り、

神聖な怒りの爆発に使用されたことばでした（申命九・七、一八、二二。詩一〇六・二九。イザヤ六五・三。ホセア八・五。ゼカリヤ一〇・三。申命二九・二五、二八参照）。すなわち、あの金の子牛礼拝が「御怒りを引き起こした」（申命九・一八）。また、バアル・ペオルにつき従い、死者へのいけにえを食べた時に、「こうして、その行いによって御怒りを引き起こし、彼らの間に神罰が下った」（詩一〇六・二九）。また、サマリヤが金、銀で偶像を造ったことに対して「怒りを燃やす」（ホセア八・五）などは、この（パロクスノマイ）で、神聖な怒りをあらわし、パウロの怒りが人間的なものでなかったことを物語っています。

※新約聖書ではこの用法以外の例もありますが（第一コリント一三・五。ヘブル一〇・二四）。

怒るなら（スーモス）の怒りや（オルゲー）の怒りで満足せず、（パロクスノマイ）の神聖な憤りを、といわれるゆえんです。東京キリスト教学園（TCI）は鬼より怖い。（パロクスノマイ）の声がすると言われたら。あのエルサレムの神殿をけがす悪徳商人たちを追い出すイエスの怒りを忘れては、イエスの弟子にあらずでしょう。そして、いまアテネのドまん中で憤ったパウロはイエスの弟子でした。クリスチャンといえば、ニコニコニコならよしとしても、ベタベタニヤニヤの「ベタニヤ」人種はむかない。清水港ではありませんが、TCIは鬼よりこわい、パロクシズムの声がする、とうたわれたい。

寛容は美德なり。しかし、真理に対する情熱、非真理に対する憤怒を失った寛容は、ただの曖昧であり、拒絶を知らぬ怠惰であり、日和見主義であり、無関心であり、持続的な対決の欠如を意味しましょう。真理は真理として、非真理をみとめないもの。寛容の美名のゆえに真理の貫徹を怠ることは相ならず、でした。

※ ※ ※

以上、使徒の憤りでした（ヘイザヤ四四・九〜二〇。出二〇・二〜五。申五・六〜九。）世界最高の知性を自負するアテネならば…と、折角いだいて来た期待がまったく裏切られたアテネ体験。―しかしだからといって、使徒は憤りのあまり、アテネを見捨てたでしょうか。違いました。宗教改革者も、その戦いの経験を裏打ちにして語ります。

「我々は次のことに注意しなければならない。すなわち、パウロは多くの人たちのこうした例に見られるように、絶対に打ちのめされたとしても、そのために、そこをすっかり放棄してしまふほどにはかき立てられはしなかった。……パウロはその教職の職責を捨て去るほど困惑によって勇気を失わせられても、困難の下で屈せられなかったばかりでなく、それは彼にまことの宗教を支えるための一層激しい拍車の役目をした。」

と。  
そうでした。怒りさえすれば、それも神に熱心なように怒ってみせさえすれば、それで事は終りではなかったのです。それは偽りの怒りであり、怒りに見せた退却であり、無為無策であり、真理伝道の放棄であり、不勉強であり、不熱心なものでした。「されど未だ信ぜぬ者をいかで呼び求むることをせん、未だ聴かぬ者をいかで信ずることをせん、宣伝ふる者なくば、いかで聴くことをせん。つかはされずば、いかで宣伝ふることをせん」（ローマ一〇・一四、一五）。

憤ったパウロは、ただちにアテネでの伝道に入ったのです。心中に憤りを秘めて。

そこでパウロは、会堂ではユダヤ人や神を敬う人たちと論じ、広場では毎日そこに居合わせた人たちと論じた。（一七・一七）

※「神を敬う人たち」（セポメノイス）一三・四三、五〇。一六・一四。一八・七、一三。一九・二

七。一九・二七は例外。

もちろん会堂ではイエスについて論証することにとめたのでしょう。そして、会堂の外、広場でも宣教しました。アクロポリスの北の市場（アゴラ）です。そこには公正の神テーミス、繁栄の神ユートリアなど。アイギウス、ヘカテー、ヘルメス、もちろんゼウスやアテナなどの神像が乱立していました。このアゴラは言論の場でもあって、ソクラテスが愛用しました。パウロはエペソでは（ツラノ）の講堂を借りきって屋内で宣教しましたが（一九・九）、臨機応変でした。アゴラに居合わせた人々は、語り出したパウロに、かつてのソクラテスの姿を思い描きましたか。パウロもソクラテス同様、見栄えのしない、チンチクリン男でした（第二コリント一〇・一〇）。またユダヤなまりのギリシャ語も人々の関心をかけたかも知れません。

しかし、さすがはアテネです。聴衆の中には哲学者が幾人かまじっていました。

エピクロス派とストア派の哲学者たちも幾人かいて、パウロと論じ合っていたが、その中のある者たちは、「このおしゃべりは、何を言うつもりなのか」と言い、ほかの者たちは、「彼は外国の神々を伝えるいるらしい」と言った。パウロがイエスと復活とを宣べ伝えたからである。（一七・一八）と。

ここに登場した「エピクロス派」と「ストア派」は、三百年ほど前に、相拮抗して起こった倫理的な哲学派でしたが、すでに三世紀をへれば、元祖たちの清朗な志は失せ、エピクロス派は奇妙な厭世的享樂主義者となり、ストア派は硬直化した禁欲主義者となりました。それでも腐っても鯛と、「新参者なにするものぞ」と、余裕たっぷりです。パウロの前に立ちはだかりました。「このおしゃべりは、何を言うつもりなのか」と。

この「おしゃべり」とは（スベルモロゴス）で、宿無し雀・残飯あさり・流れ者のことです。だから、「このスベルモロゴスは、何を言うつもりなのか」とは、「この残飯あさりの宿無し風来坊が、何をほざくやら。」といった皮肉で、「燕雀なんぞ大鵬の志を知らんや。」という威勢だったのです。もっとも、ほかの者たちは「彼は外国の神々を伝えているらしい。」と言ったと。

※ソクラテスの告訴状、「ソクラテスは犯罪人である。青年に対して有害な影響を与え、国家の認める神々を認めず、別の新しいダイモンのたぐいを祭る。」〔ソクラテスの弁明〕一一…（参考）

ここで、ほかの者たちが「彼（パウロ）は外国の神々を（クセノー・ダイモニオン）」と言っていることについて。—パウロは唯一の神を語ったはずなのに、なぜ複数の神々と言われたか。—それがまったくの苦笑ものでした。「パウロがイエスと復活とを宣べ伝えたからである」と、ルカは注記しています。

つまり、パウロが盛んに「イエス」（イエス）と「復活」（アナスタシス）と口走ったので、一知半解の聴衆は、「イエス」という神と「復活」という神とをパウロが伝えていると思ったらしい、とルカは説明しているのです。〈イエスス〉という男神と〈アナスタシス〉という女神のことだと聞き違えていたらしい、と。それも、どうも、その「イエス」のほうも、「イエス」が〈イエスス〉で、これが〈癒し〉を意味する〈イアシス〉のこと、〈健康〉の女神〈イエーソー〉と聞き違えられた可能性もありえました。とすると、パウロが「イエス」と「復活」を宣べ伝えていたのを、なにか「健康」（イエーソー）と「回復」（アナスタシス）。つまり「癒し」と「回復」の秘術を宣伝しているのか、と思われたのかも知れません。

とにかく、なんでも新しいもの、ものめずらしいことに聞き耳をたてる市民のこととて、聞いてやれ、とばかり、

そこで彼らは、パウロをアレオパゴスに連れて行ってこう言った。「あなたの語っているその新しい教えがどんなものであるか、知らせていただけませんか。私たちにっては珍しいことを聞かせてくださるので、それがいったいどんなものか、私たちは知りたいのです。」アテネ人も、そこに住む外国人もみな、何か耳新しいことを話したり、聞いたりすることだけで、日を過ごしていた。へ一七・一九〜二一

※当時のアテネの人口は一人余りと推定されています (Richard Longenecker : p.473)

このアレオパゴスの丘というのは、アクロポリスの丘の西にせまる一一五メートルの岩山の広場で、その上に立てば、その上四〇メートルほどにアクロポリスがせり上がり、ひるがえれば、アテネの市街、さらに八キロメートルさきには地中海がひろがっており、アテネの外港ピレクスが幾多の船舶を擁していました。こうして、ヨーロッパ文明発祥の地、しかもそのドまん中での、ナザレのイエス宣教となるのです。

※「アレオパゴス」は「アレスの丘」。(へアレス)は戦争の神、ローマの軍神マルスに相応します。それゆえ「アレスの丘」は、ローマ風に「マルスの丘」と呼ばれました。

※※「彼らは、パウロをアレオパゴスに連れて行って」とありますが、パウロを連行していったのか、同伴して行ったのか。

※※※「アレオパゴス」には最高評議所があります。パウロは、ただアレオパゴスの丘の上に立ったのか、それともアレオパゴス丘上の最高評議所に立ったのか。この評議所は宗教・教育問題を審議するところです。二二節には「パウロは、アレオパゴスの真ん中(エン・メソー)に立って」とあります。

※※※聞くだけなら、アゴラでも聞けたでしょう。それが習慣でしたから。それをわざわざアレオ

パゴスに連れて行ったというからにはただの場所変えというのではなくて、パウロは「アレオパゴスの真ん中に（エン・メソー）立った」のであり、この「真ん中（エン・メソー）」は建物の中という用法が散見されるのです。たとえば、エルサレムでも「彼らは使徒たちを真ん中に立たせて」（エン・トー・メソー）は、議会場の真ん中でした。そして、いまアテネでも、このあと、「こうして、パウロは彼らの中から出て行った」（エク・メゾー・アウトーン）というのも、評議所の中でパウロを囲んで聴問していた人々の中から出て行ったとも解されます。また「パウロをアレオパゴスに連れて行って」（エピ・トン・アレイオン・パゴン）の（エピ）は「に」でなく「前に」とする可能性があります。すぐ前の一七・六では「町の役人たちのところへ」も（エピ）、一六・一九でも「役人たちに」も（エピ）で、いずれも「前に」と解されます。もし、評議所の中だとすると、そこで審議され、パスすると講者としての資格が与えられました。はたして。

使徒パウロは、本格的な福音伝道の舞台に導かれます。アレオパゴスへの石段を踏みしめながら、あれこれと想を練って、口を開いた時は、なかなかの出だしでした。

そこでパウロは、アレオパゴスの真ん中に立って言った。「アテネの人たち。あらゆる点から見て、私にはあなたがたを宗教心にあつい方々だと見ております。へ一七・二二」

※「宗教心にあつい方々」（デイシダイモネステロウス）は、「宗教心にあつい方々」とも、「迷信的な方々」ともとれます。前者は積極的、後者は消極的な語勢ですが。

「私が道を通りながら、あなたがたの拝むものをよく見ているうちに、『知られない神に』と刻まれた祭壇があるのを見つけました。そこで、あなたがたが知らずに拝んでいるものを、教えましょう。へ一

※ここで「知られない神に」(アグノースト・セオー)と、神が単数で言われていることについて。「知られない神々に」と複数の神名のほかに、単数の「神に」という祭壇があったという証拠はないという議論が起ります。(アグノーストイス・セオイス)はあるけれども、(アグノースト・セオー)はなかった、と。チュービンゲン学派のバウル、ツェラー、またシュヴァイツァー以下、バルク、バーレット、コンツェルマン、ディベリウス、ゲルトナー、またストーンハウスなどが論述するところです。たしかに、二世紀の旅行家パウサニアスや三世紀の哲学者フィロストラトスには「知られない神々に」という祭壇のことが録されています。しかし、たとえば、今日発見されているものが、たまたま「神々」と複数神名であるとしても、当時、「神」と単数神名のものとはなかったと断言しえません。たとえば、多神論の世界でも特定の単数神、適切な神(プロセーコンティ・セオー)にささげる祭壇がありました(ディオゲネス・ラウレチウスの『哲学者列伝』一：一〇のクレテのエピメニデスの項など)。日本も多神教風土ですが、特定の一つの神に祈願しています。

もっとも、使徒自身か、ルカが唯一の神の宣教の糸口にと、単数神名にしたこともありえましょう。最後に古代の文献云々というのでしたら、この第一世紀の『使徒の働き』という文書の一七：二三に厳存してはありますか。

※※「知られない神に」といって、第一テサロニケ四：五、ガラテヤ四：九など参照。

ここで、パウロは神について宣教します。神は万物の創造者であり、支えてであることの二点で語り出します。



この世界とそこの中にあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにはお住みになりません。また、何かに不自由なことでもあるかのように、人の手によって仕えらるる必要はありません。神は、すべての人に、いのちと息と万物とをお与えになった方だからです。へ一七・二四、二五

「天地の主ですから、手でこしらえた宮などには」と、パウロは聳え立つパルテノン神殿を、エレクチオン神殿を指さしたのでしょうか（第一列王八・二七。イザヤ六六・一、二。使徒七・四七〜五〇参照）。ために巨大神殿は軒先三寸下がったか。

※神殿は、ゼウス（火）をあらわす暗赤色、ポセイドン（水）をあらわす暗青色、ガイア（土）をあらわす暗黄土色の線画でいろどられています。

神は、ひとりの人からすべての国の人々を造り出して、地の全面に住ませ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とをお定めになりました。これは、神を求めさせるためであって、もし探り求めることでもあるなら、神を見いだすこともあるのです。確かに、神は、私たちひとりひとりから遠く離れてはおられません。私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。あなたがたのある詩人たちも、『私たちもまたその子孫である』と言ったとおりです。へ一七・二六〜二八

出だしと言ひ、展開と言ひ、今までのところではついぞ聞かなかった名調子でした。パウロがアテネを意図していることを物語っています。異邦人には異邦人のように、そしてアテネにはアテネ向きに。待機説法の苦心でした。開口一番アテネを宗教熱心と語り出し、第一の掘り起しの題材は、道々見つけた一つの祭壇であり、その「知られない神に」という文字から、「あなたがたが知らずに拜んでいるものを教えましょう。」と鍵をあける。ちょうど、「なにごとのおわしますかは知らねどもかたじけなさに涙あふるる」といっ

た漠としている人々を開眼させようと。

アテネの聴衆への敬意と皮肉の玉虫色から、何でも知っていると自負するアテネが「知らない」と告白している神を知らせてあげたいと蓋をあけたのでした。「人の手によって仕えられる必要はありません」としてギリシヤの祭礼・祭祀を撃破します。そして、万民平等の提唱でした。

神は、ひとりの人からすべての国の人々を造り出して、地の全面に住ませ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とをお定めになりました。〈一七二・二六〉

※創一〇。申三二・八。詩七四・一二〜一四。ヨブ三八・八〜一一。また創一・二四、二八参照。

つまり、人という人はみなアダムより出たもの。とすれば、みな兄弟同胞であり、どの民族がどの民族よりも貴いとか、質が違ふとかいうことはないはずであり、ギリシヤ人こそ世界に冠たる者という中華思想を撃つものであったことはいまでもありません。ギリシヤ人は、もともとギリシヤの地から出たのだと自負していたのです。そして、もし、このように天地がひとりの神につくられたものであり、人もまた一人からつくられたものであるとするならば、神は遠くにいるものではなく、身近なものであるはずであり、身近なところから探せる、見つけられるはずとつながられました。

これは、神を求めさせるためであって、もし探り求めることでもあるなら、神を見いだすこともあるのです。確かに、神は、私たちひとりひとりから遠く離れてはおられません。〈詩一四五・一八。エレミヤ二三・二三〉。私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。あなたがたのある詩人たちも、『私たちがまたその子孫である』と言ったとおりです。〈一七二・二七、二八〉と。

この「私たちは、神の中に生き、動き、また存在している。」は、BC六〇〇年ごろのクレテの詩人「エ

ピメデス」の四行詩からの引用。また「私たちもまたその子孫である」は、BC三一五〜二四〇年のキリキヤ生まれの「アラトス」、あるいは、同じストア派の「クレアンテス」(BC三三一〜二三三)からとも言われます。なんとかして、アテネ人の耳を開いて救いにみちびきたいとの工夫なのでした。伝道の苦心、工夫、ぜひ共通の地盤で、との配慮でした。相手かたの地声に耳を傾け、そこに真理の種子がみとめられれば、それを掘り出して活用する。真理はすべて神のものゆえ。ましてや、それが彼らの權威とする言葉であればあるだけ、いっそう効果があるというものでした。

こうして、パウロは、汎神論、多神論に対して、天地の主としての神の超越性、超自然性と同時に、われわれはその御手の中に生き、動き、存在しているとして、神の親しさ、親しみやすさを合わせ説いたのでした。これらが、いかに当時のギリシャ人の神に対する考えを変えるものであったかは、知る人ぞ知るでした。たとえば、聴衆の中にいたエピクロス派、ストア派の哲学者たちの神観念はどうだったのでしょうか。エピクロス派は、神々というものは遙か彼方、天空の彼方に、自ら仕合せな暮らしをいとなんでいて、人間どもの暮らしたんぞには関心しない、遠縁の神。一方、ストア派の神観念は、汎神論であり、世界の内に存在し、「根源火」とも呼びます。こちらは内在の神。

これらに対して、パウロは弁証します。まず、ストア派の神は世界の内にあるという考えに対して、真の神は世界を造ったかたであって、世界の内に閉じ込められず、超越しておられると打ち出すのであり、他方、逆にエピクロス派が、神々は遙か彼方に、人間とは縁遠い存在とするのに対して、神は疎遠なおかたではなく、私たちは神の内に生き、動き、また存在しているほど身近なのだを弁証したことになります。神の偉大さと親しさと。

—これより三百数十年前に、同じアテネでひたてられたソクラテスは、「わが輩は、神によって、この国都に付着させられている者である。それはちやうど、ここに一匹の馬がいるとして、素性のよい大きな馬なのだが、図体が大きいために、総身に知恵がまわりかね、目をさましているためには、蛇のようなものが突っついていなければならない。神はわが輩が諸君を目ざめさせるために各人一人一人にどこへでもついて行って、膝をまじえ、まる一日、説得したり、非難したりすることを、少しもやめない。—こういう人間をわが輩のほかにもう一人さがすといっても、そうたやすく得られまい。むしろ、もし諸君にわが輩のいう意味がわかるならば、諸君はわが輩を大切におこななければならぬことになるだろう。しかし、諸君はたぶん眠りかけているところに腹を立てて、わが輩を叩いて、軽々に殺してしまうであろう。そして、それからの一生をぐっすりと眠りつづけることになる。もし神が諸君のことを心配して、だれかもう一人、別の人を諸君のところへ、もう一度つかわされるのではないならば。」〔『ソクラテスの弁明』三一・九〕。

この裁判で、ソクラテスは死刑を宣せられました。アテネはソクラテスを一匹の蛇のように叩きつづぶしたのです。ところで、なのですが、このソクラテスの結びの言葉に吸いつけられます。

「諸君はわが輩を叩いて、軽々に殺してしまふであろう。そして、それからの一生をぐっすりと眠りつづけることになる。もし、神が諸君のことを心配して、だれかもう一人、別の人を諸君のところへ、もう一度つかわされるのではないならば。」

その「もう一人、別の人」、眠りこけるアテネの目をさまそうとつかわされる人とは、このパウロのことだったのか。ソクラテスの希望は、三百四十八年後、AD五一年の初夏に、使徒パウロのアテネ宣教によって成就されたことになりましたか！

この日、使徒パウロが投じた一石、真の神の教えの一弾は、やがて、アテネを、全ギリシヤを根元から揺り動かし、そのヘレニズムをキリスト教に一変させ、国旗を十字架で染めあげさせるにいたったのです！これも、パウロのあの憤りに包まれていた救霊の熱心と努力あつてのことでした。

そのように私たちは神の子孫ですから、神を、人間の技術や工夫で造った金や銀や石などの像と同じものと考えてはいけません。神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。〈一七・二九、三〇〉

私たちは人間は神のかたちに似せてつくられたのであり、生き、動き、良心をはたらかせている。決して人間自身がつくった金や銀や石などの生命の無い偶像ではない。ましてや〈神〉はそんなものではない。それこそ、人間はミミズ一匹つくることもできないのに、神さまとなると幾らでも製造する〈申四・二八。イザヤ四〇・一八、二〇。四四・九、一〇。四六・五、六。詩一一五・四、八〉。

創造主の神を知ることなくして、偶像の愚を知ることなし。(カルヴァン)  
でした。

私たち自身、この二九節をもって一切の偶像から解放されました。石像であろうと、木像であろうと、銅像、金像であろうと、またいかに由緒があろうとも。

遠く預言者イザヤの声が聞こえます。

偶像を造る者はみな、むなししい。彼らの慕うものは何の役にも立たない。彼らの仕えるものは、見ることもできず、知ることもできない。彼らはただ恥を見るだけだ。だれが、いったい、何の役にも立たない神を造り、偶像を鑄たのだらうか。見よ。その信徒たちはみな、恥を見る。それを細工した者が人間にすぎないからだ。彼らはみな集まり、立つがよい。彼らはおのいて共に恥を見る。

鉄で細工する者はなたを使い、炭火の上で細工し、金槌でこれを形造り、力ある腕でそれを造る。彼も腹がすくと力がなくなり、水を飲まないと疲れてしまう。木で細工する者は、測りなわで測り、朱で輪郭をとり、かんなどで削り、コンパスで線を引き、人の形に造り、人間の美しい姿に仕上げ、神殿に安置する。彼は杉の木を切り、あるいはうばめがしや檜の木を選んで、林の木の中で自分のために育てる。また、月桂樹を植えると、大雨が育てる。それは人間のたきぎになり、人はそのいくらかを取って暖まり、また、これを燃やしてパンを焼く。また、これで神を造って拝み、それを偶像に仕立てて、これにひれ伏す。その半分は火に燃やし、その半分で肉を食べ、あぶり肉をあぶって満腹する。また、暖まって、『ああ、暖まった。熱くなった』と言う。その残りで神を造り、自分の偶像とし、それにひれ伏して拝み、それに祈って『私を救ってください。あなたは私の神だから』と言う。(四四・九一七)

林の木を切り出し、薪にして「ああ、ぬくい」と手をあぶる。竈かまどで燃やしてパンを焼く。そして同じ木で神さまをつくる。：。「まあこれくらい<sup>の</sup>出来で」と神棚にかざる。倒れてしまわないようにと台座をつける。盗まれないようにと鎖でつなぐ。保険をかける。そのうえで、「ああ神さま、有難うございます。商売繁盛、無病息災、家内安全、死んでも生命がありますように。」と手をうつ。：。ナンセンスの極み。それを生業なりわいとする神官・僧侶が出る。あたり一生を、裏山の木の端くれに三拝九拝して終ろうとする。

彼らは知りもせず、悟りもしない。彼らの目は固くふさがって見ることでもできず、彼らの心もふさがって悟ることもできない。彼らは考えてもみず、知識も英知もないので、「私は、その半分を火に燃やし、その炭火でパンを焼き、肉をあぶって食べた。その残りで忌みきらうべき物(偶像)を造り、木の切れ端の前にひれ伏すのだろうか」とさえ言わない。(そんな) 灰にあこがれる者の心は欺かれ、惑わされ、自分を救い出すことができず、「私の(細工する) 右の手には偽りが無いのだろうか」とさえ言わ

ない。〈四四・一八〜二〇〉

痛烈、痛切、痛恨。もう一ヶ所、『新約聖書』から。『ローマ人への手紙』第一章です。

神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。へローマ一・二〇〜二五〉

これは当時の地中海世界の政治・経済の中心地ローマ帝国の都ローマあての手紙ですが、これがしたためられたのはギリシャのコリントでした。ですから「彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり」〈二二〉という文句は地つづぎのアテネでの体験を織り込んだものでしょうか。

いま『使徒の働き』に帰って、

そのように私たちは神の子孫ですから、神を、人間の技術や工夫で造った金や銀や石などの像と同じものと考えてはいけません。神は、そのような無知の時代を見過ごしておられました。今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。〈一七・二九〉

と。アテネに「無知」という言葉をぶつけたのは、三百四十八年前の「ソクラテス」と、この宣教師「パウ

口」をもって双壁としましう。

「そのような無知の時代を見過ごしておられましたか」とは、どういう意味なのか、『レビ記』には意識しないで犯した罪が分類されていましたが、この神の見過ごしは〈悔改め〉にいたるためと考えられますし、また無知が開かれる時が到来した。すなわち、真の神ご自身が人となって現われた。そのイエス・キリストが来られた。その〈復活〉は、その証拠である、と。

神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたか、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。なぜなら、神はお立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの確証をすべての人にお与えになったのです。

ここに記録されているのは筆者ルカによるダイジェストであって、実際はもっと長く詳しくあったでしょうが、筋道はこの通りだったのです。創造主の神、摂理の神、偶像の愚を序論として、本論に入れば、その無知を開明するために、神ご自身が来られた。悔改めの機会が恵まれている。救いが提供されている。それも世界審判の前に。そして、われわれの罪の贖いが果たされている証拠は、贖主イエス・キリストの復活である、と。これで、よろしいでしょう。

※ ※ ※

ところが、本論の主イエス・キリスト、ことに〈復活〉となるや、アテネの聴衆は足を踏み鳴らし出します。日々耳あたらしいゴシップで暮らしていた市民根性は、悔い改めとか回心話とかには反撥する。「われ



らアテネ市民に回心までせまるか」と。そのうえ、「死んで三日目に復活したなどと。ソクラテスだって、プラトンだって、エピクロスだって、ゼノンだって死んで土と化した。それを死んで三日もたってから復活したなどとは開いた口がふさがらぬ。」と嘲笑したのです。

せいぜい宣教師パウロが〈靈魂不滅〉くらいを説いたとしたら、エピクロス派は同意しないとしても、ストア派や多くの市民は耳をかしていたのかも知れない。

死者の復活のことを聞くと、ある者たちはあざ笑ひ、ほかの者たちは、「このことについては、またいつか聞くことにしよう」と言った。〈一七・三二〉

冷笑と、体のいい皮肉でした。氷のような冷笑と、煮湯のような皮肉を浴びて立ち去るパウロ。

こうして、パウロは彼らの中から出て行った。〈三三〉

〈悔い改め〉に反撥し、〈審判〉に耳をふさぎ、〈復活〉を一笑に付した聴衆。―ほかでもない私どもこのアテネ人の子孫でした。もし、アテネの空も、海も、大地も創造した神なら、太陽を沈め、昇らせ、種子を実らせ、海を干き満たす神なら、〈復活〉は何の不思議ではなかったはず。やはり、聴衆の神々が人間お手製の神々だったから、その視線で〈復活〉は受けつけることができなかったのでしょう。偶像が彼らの思考範囲を限っていたからか。偶像を造り、祭り、仕える害でした。偶像の害でした。

※五〇〇年ほど前、悲劇詩人アエスキュロス（BC五二五〜四五六）はアテネのアレオパゴス評議所規定を録す中で、アポロ神は言うとして「地の塵が血を吸いこまば、ひとたび死して復活することなし」と叙していました（ユーマニデス六四七、六四八）。また、ホメロスの『オデュッセイア』一一・一六〇〜二二五。『イリアス』二四・五五一も同調です。

以上、重ねて二つの点を確認しましょう。第一、まず偶像を偶像とはっきり確認する。たとえ不粹といわ

れようと、不興を買おうと。偶像を偶像と確認すること。これが私たちの〈立場〉です。そして第二、「立場」はそうでも、「態度」の問題を無視してはならぬということ。伝道の姿勢・努力の態度です。真理の〈立場〉と真理を伝える〈態度〉とです。

使徒が真理愛に燃えて、アテネの偶像群に憤りを発しながら、その反面、アテネを見捨てたのではなかったのです。むしろ、高慢で人を見くぢしたのは「このおしゃべりは何を言うつもりなのか」と、うそおいたアテネの人々でした。また死人のよみがえりを聞くと、「ある者たちはあざ笑い」、「またいつか聞いてやるよ」と冷笑したアテネの市民たちのほうだったのではありませんか。

使徒パウロは不動の〈立場〉で福音を伝えた。それも、彼自身は謙虚な態度で。彼は最晩年に恐縮して申しています。

「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に來られた」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです（と自覚し）。しかし、そのような私があるわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対して（叩き台にして）この上ない寛容を示してくださいましたからです。〈第一テモテ一・一五〜一六〉

という姿勢でした。この真理に立つ〈立場〉と、真理を伝える〈態度〉。この二つをどのように調和させて行くか、大いに苦心して行かなければなりません。一方には異教に対する怒りを失ってしまった文化的キリスト教、他方には異教を罵倒して伝道の忍耐工夫を放棄した独善的キリスト教—この二つの間に苦心し、苦勞したい。

アテネのドまん中で、憤った使徒パウロの燃え上がる真理愛と、その火を矯め、凌ぎ、宣教に挺身した使命感と―それを与えたまえ、と祈らされるのです。

上なき知恵に 照らされたる

われらはいかで この光を、

暗きにまよう 世の民らに

照らさでかくし 秘めおくべき。

大君イエスの み代をしらす

時のくるまで いよよ励み、

救いのひかり 高くかかげ、

あまねく照らせ 四方の国に。

レギナルド・ヒーバー (讚美歌二一四)

さて、これだけの決心と工夫の上で敢行された使徒パウロのアテネ宣教は、どんな結果で報われたでしょうか。

死者の復活のことを聞くと、ある者たちはあざ笑い、ほかの者たちは、「このことについては、またいつか聞くことにしよう」と言った。こうして、パウロは彼らの中から出て行った。(一七：三二)と。

※評議所では、パウロの述べるところは是とされず、その活動をゆるすことを決しなかったの  
う。

※ ※ ※

パウロのアレオパゴスでの宣教はどれほどの時間だったのか。しかし、その効果のほどはどうだったのか。これを失敗と見ることもできるでしょう。氷のような冷笑と煮湯のような皮肉を浴びせられて立ち去るパウロの後姿が記録されています。

こうして、パウロは彼らの中から出て行った。〈三三三〉

と。たしかに、ルカの記録には〈イエス〉の〈イ〉の字も見えていません。「アテネの諸君」などと気取った口上。また詩人たちからの引用を重ねあわせての擬りかた。こんなまわり道など…と評されることもありましょう。

※それゆえ、アテネの次におとずれたコリントでは「私があなたがたのところへ行ったとき、私は、すぐれたことば、すぐれた知恵を用いて、神のあかしを宣べ伝えることはしませんでした。なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかに、何も知らないことに決心したからです。あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く、恐れおののいていました。そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行われたものではなく、御霊と御力の現れでした。それは、あなたがたの持つ信仰が、人間の知恵にささえられず、神の力にささえられるためでした。」〈第一コリント二・一〜五。また一・一八〜三一も〉と語っており、宣教

をイエス・キリストとその十字架にしぼることにしたと。反省したからではないか、とも読めましようか。

しかし、しかしこのアテネのドまん中。アレオパゴスのパウロの宣教には成果がありました。

しかし、彼につき従って信仰に入った人たちもいた。それは、アレオパゴスの裁判官デオヌシオ、ダマリズという女、その他の人々であった。(一七・三四)

と。

今までの伝道地では、「多く」の回心者が出ました。ピシデヤのアンテオケでも、イコニオムでも、すぐ前のペレヤでも、「多くの者」が信仰に入った、とありました(一三・四三、四八、四九。一四・一、二一。一七・四、一二)。それがアテネでは「多く」はなかったようです。第二世紀に入っても、アテネの教会名は知られませんでした。パウロ自身、次の第三回伝道旅行でアテネに足をとどめたという記録は見えていません。(二〇・二、三)

けれども、パウロの熱心と苦心は用いられていたのです。聴く耳を与えられた者、信じた者の名簿が残されています！アレオパゴスの裁判官デオヌシオは、アテネの牧師になったとユージェピオスは伝えます(『教会史』Ⅲ四・一一)。クリソストムは、この「ダマリズという女」とはデオヌシオの妻ではないかと言い、ラムゼイは遊女<sup>タイタ</sup>ではなかったかと申しています。あるいは、ペレヤにもいた「貴婦人」族かとも(一二)。いずれにせよ、アテネの町にも幾粒かの麦は芽生えたのです。ある人は、この三二節以下こそ、「その後の世界思潮の波瀾をこの数行に括約したもの」と申しています。―多くの者は福音を嘲笑う。しかし少数者は信ずると。(岩下壮一『中世哲学思想史研究』四頁)

今日、あのアテネのアクロポリスの丘の西側に面する大通りは「使徒パウロ通り」と命名され、南側の道は、なんとアテネの初穂「アレオパゴスのデオヌシオ通り」と命名されているそうです！「エピクロス通り」でも「ストア派通り」でもなく、そしてギリシャ国旗そのものが、ブルー地に白線四本のストライプと、十字架印となっているのです。

今日の私たちが、この記録から教えられることは何か。まずは、あのパウロの使命感をもってした偶像風土に対する憤り（パロクスモス）。次は、偶像を呪詛するばかりでなく、伝道に向かう努力、工夫。そして福音宣教が笑われること。（神の神たること、とその力をわきまえないゆえに。）そして、そして神のことは決して空しくはおわらないということです。

あまねくのべよ、よき知らせを、

まことの幸を もとめつつも、

むなしきものに さそわれゆく、

世のはらからに のべつたえよ。

由木 康（讚美歌二二五）

二〇〇九年一〇月二十九日（木）